

「終電がない」だけでは 説明のつかない「君の 義理堅さ」

岡部 正義

えとなるケースが少なくない
ようだった。

約束の土曜日、風雨はおさ
まり、曇天ながらもマニラ市
内をなんとか移動できるよう
になった。しかし、多くの友
人たちが「ごめんなさい、今
日は仕事（学校）に行かなく
ちゃいけないから日中は帰っ

てこれないんだ」とメールで報せてきてくれ
た。私もその日は夕方にはその地を出発して別
の目的地に向かわなければならなかった。結局、
訪問時にはわずか一人の男の子としか会えず、
「他のみんなは仕事や授業に行ってるよ...。」と
彼も残念そうだった。その「みんな」のなか
には、親友「J君」も入っていた。

台風が相次いで日本を襲撃した昨年九月下
旬、フィリピン行きを計画していた。しかし、
運悪く出発当日にフィリピン東方沖に台風が渦
巻いていた。フライトはお決まりのように遅延
し、ニノイ・アキノ国際空港（NAIA）着陸
時にはジェットコースターの滑降さながらの乱
高下を繰り返して、恐ろしい思いでマニラに着い
た。NAIAを出た途端、空港の自動ドアの前
を滝のような水が直下している。ロータリーは
すでに川のように冠水し、迎いの車に飛び乗る
も両側にアーチ状に水をかき上げながらゴォー
とにぶい音を立てて走っていく。「ははは、と
んでもないときに来ちゃいましたね」と運転手
さんも苦笑い。久しぶりに現地の友人たちに会
いに行くことが目的のひとつにあったが、この
台風こそがその再会をあわや切り裂こうとした
のである。

予定では、到着した日（金曜日）の翌日に友
人たちの集落へ行く約束だった。以前に訪れた
ときはハイスクール生だった少年少女もいまや
大学生や社会人となっている。土曜日ならば学
校や仕事が終わるから会おうに打ってつけだっ
たが、台風により金曜日に多くの学校や仕事が
休みとなった。そのため、翌日の土曜日に振替

「J君は前回の五年前の訪問時に意気投合し、
将来の夢やお互いの国のことを語り合ったナイ
スガイ。彼は私をbrotherとかmy best friend
と呼んでくれている。フィリピン人はしめっぽ
さもなくこういうことが言えてしまうから感心
する。もちろんリップ・サービスの部分がある
ことはさつ引いても素直に嬉しい。とにかく、
フィリピンに足を運んだからにはまずJ君と顔
を合わさなければと私は思っていた。しかし、
ついに土曜日にJ君と再会が果たせなかった。

未練がありつつもこの集落を後にし、次の目
的地訪問も終え、ホテルに戻った夜、携帯電話
に「今日は会えずに残念だったよ！明日は何
時に出かけるの？ホテルはどこ？」とJ君から
メールが来た。ホテルの場所と、翌日（日曜日）
は朝九時くらいにはまた別の目的地に出かける
予定だということを返信した。「そこは僕の職

場から近いホテルだ！じゃあ明日の朝四時に行
けば、会えるね？」朝の四時とはなんとも日本
ではあり得ない時間設定である。「おいおい、
四時にここまで来られるのか」と訊ねれば、「フ
ィリピン人をなめてもらっちゃこまるね。ジー
プニーに乗れば終電なんて関係ないのさ」と得
意げな返信が来た。フィリピンは高架鉄道の終
電は早い（夜九時）。しかし、ジープニーとい
う乗り合いタクシーが町には縦横に走ってい
て、これが庶民の足となっている。ジープニー
には終電なんていう感覚はないのである。

彼は翌日、約束した時間より早く、朝四時の
半時間前にすでにホテルに到着し、私にモーニ
ングコールまでする周到さだった。きっと彼は
夜中の二時には目を覚まし、家を出ていたのだ
ろう。旧交を温め、話を花を咲かせていると、
彼は急に「頭が痛い」と言い出した。「はは、
早起きしすぎたからだ。少し部屋で寝かせても
らえるかな」彼はまるで大仕事を終えて安堵し
たかのように私の部屋のベッドに崩れた。

一目でいいから日本から来た知己に会おう
と、夜中に眠たい目と仕事で疲れた体を押して
深夜にジープニーを乗り継ぎながら飛んできて
くれた姿が彼の寝顔を通して浮かんできた。フ
ィリピン人の心優しく義理堅い気質はフィリピ
ン・ホスピタリティとして知られているところ
であるが、今回の一件は、「終電がないから」
だけでは決して済まされない大いなるフィリピ
ン・ホスピタリティを感じさせてくれた。そん
なエピソードがまたひとつ増え、またこの国を
好きになった。

（おかべ まさよし／アジア経済研究所 研究支
援部）